

和歌山市田屋阿弥陀寺墓地の石造物調査報告

—— 一石五輪塔を中心に ——

The report about investigation into Sekizoubutu of Amidaji Temple's graves in Taya, Wakayama city.

海津 一朗 梅田 志保 岩本 茉莉

Kaizu Ichiro

Umeda Shiho

Iwamoto Mari

2006年10月6日受理

序、はじめに

一石五輪塔を中心とする石造物は、地域の歴史、特に文字には残らない人々の姿を明らかにする上で、欠かすことのできない史料である。和歌山大学日本史ゼミでは、'05、'06両年度にわたり、和歌山市田屋にある正覚山阿弥陀寺において石造物調査を行った。現地本調査は2005年4月9日、2006年7月17日の両日で、阿弥陀寺内墓地の石造物のうち、特に一石五輪塔を中心に悉皆調査をした。調査方法としては、まず見取り図を書き、石造物に番号を付け、計測・写真撮影・拓本採集などを行った¹⁾。

阿弥陀寺内には、この他にも地藏堂内石造物群があるが、これについては別途北野隆亮氏が調査し、報告している²⁾ (写真1)。

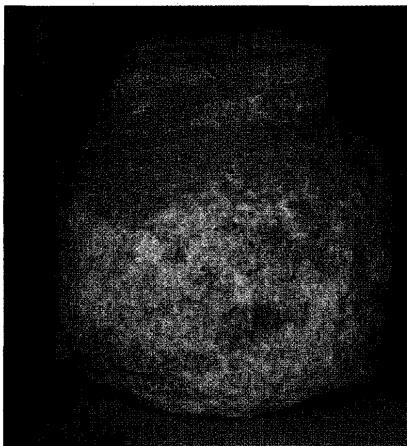


写真1

1、石造物調査の成果

ここではまず2回に分けて行われた石造物調査の調査成果について述べていきたい。なお、全一石五輪塔の詳細なデータや拓本、形態、配置図に関しては、それぞれ文末の資料1、資料2、資料3、資料4を参照していただきたい。

調査地である正覚山阿弥陀寺は、阿弥陀三尊立像を本尊に持つ浄土宗西山派の寺院で、和歌山市梶取の総持寺とは本末関係にある。同寺の過去帳によると、開

基は1524(大永4)年の文恵大徳で、二世は1683(天和3)年想空賢瑞上人が法燈継承とある。おそらく二世より西山派寺院となったと考えられるが、その間159年間の空白が見られるなど、開創期についての詳細はよくわかっていない。

阿弥陀寺のある和歌山市田屋は、紀ノ川下流左岸に位置し、ほぼ東西に六ヶ井用水がながれている。地内には田屋遺跡があり、弥生時代後期から古墳時代の竪穴住居群が発掘されている。また、同じ田屋村にかつてあったとされる正法寺・安楽寺が、ともに1585(天正13)年の兵火により焼失したとされる³⁾。これに関しては後ほど触れることとする。

調査対象の石造物は、現在は阿弥陀内の墓地の一角に階段状に並べてある(写真2)。しかし同寺住職の話によると、もともとは現在の接待所のあたりに埋まっていたようである。また個人墓の敷地内に3基一石五輪塔が並べられてある。



写真2

今回確認できた一石五輪塔は63基で、材質は全て砂岩である。そのうち完形は4基、欠損は59基で、完形の一石五輪塔は全体の僅か6.8%にすぎない。同じく、有銘は31基、無銘は32基で、銘を持つ一石五輪塔は全体の49.2%にのぼり、ほぼ半数の一石五輪塔が銘文を持っていることになる(表1)。

表 1

有銘	完形	紀年 有	3	3
		紀年 無・欠	0	
	欠損	紀年 有	27	28
		紀年 無・欠	1	
無銘	完形		1	
	欠損		31	

銘文があるもののうち、紀年銘のあるものは30基で、判読不可のものを除くと、1537(天文6)年、1561(永禄四)年、1567(同10)年、1571(元龜2)年、1585(天正13)年、1617(元和3)年、1630(寛永7)年、1634(同11)年、1635(同12)年、1638(同15)年、1645(正保2)年、1651(慶安4)年、1652(承応元)年、1655(同4)年、1656(明暦2)年、1655~1658(明暦□)年、1659(万治2)年、1667(寛文7)年、1672(寛文12)年、1676(延宝4)年、1682(天和2)、1683(同3)年、1717(享保2)年の銘がある。

また、今回の調査では五輪塔(組み立て式)の地輪が見つかった(写真3)。



写真 3

2、石造物から見る田屋

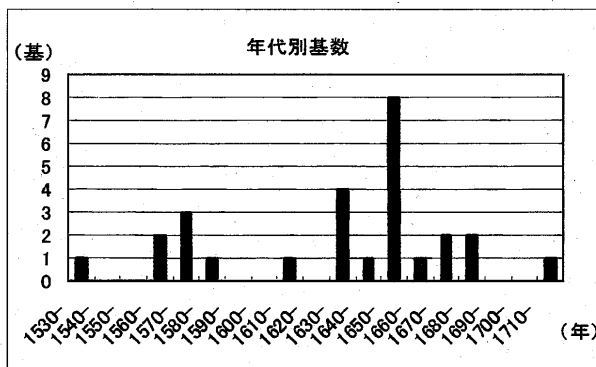
ここでは、1の成果をふまえて、近年盛んに行われている石造物調査の調査成果と比較・検討することで、阿弥陀寺内墓地の石造物の性格を把握し、位置づけると共に、田屋および周辺地域の歴史を考えてみたい。

a 年代

阿弥陀寺内墓地の一石五輪塔の年代分布は1537(天文6)年から1717(享保2)年の180年間で、1650年代に造られたものが特に多い(表2)。また、1537-1561、1585-1617、1683-1717と、3度の空白期間がある。無銘の一石五輪塔も多数存在していることから、完全に

空白だったかは定かではない。しかしながら、1585-1617の空白期間に関して言うと、豊臣秀吉による紀州攻めが行われた1585(天正13)年から始まっていること、『紀伊続風土記』に、同じ田屋村において、この天正の兵火で焼失したとされる寺院が2例記載されていることから考えるに、この空白期間は、天正の兵火で田屋あるいはその周辺地域が大きな被害を被った証と考えることができるだろう。

表 2



b 形態

始めに一石五輪塔の形態の変遷を見ていきたい。ただし、今回調査した一石五輪塔のうち、完形のもののごく僅かだったことから、今回は空風火水地の5パーツのうち、比較的残りのよかった地輪に絞って見ていきたい。

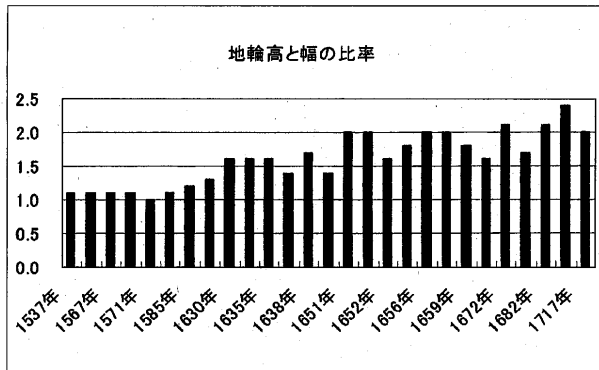
地輪高と地輪幅との比率をしてみると、以下のような特徴がある(表3)。

- ①16世紀中頃~末は地輪の高さと幅の比率がほぼ1に近い
- ②17世紀に入ると一部の例外を除き徐々に比率が大きくなる
- ③18世紀にはいると比率が小さくなる

つまり、17世紀までは地輪は正方形をしているが、17世紀にはいると徐々に長くなり、18世紀には逆に縮んでいくといえる。これは他地域と比較しても同じような変遷を辿る。

ただし③に関しては、18世紀以降の一石五輪塔が1基しか見つかっておらず、本当にこれ以降比率が小さくなっていく現れなのか、それとも単に17世紀にもあったようなばらつきの一つなのかはまだ検討の余地がある。

表 3



c 銘文

銘文のあるものは1でも書いたように、全体の約半数にのぼる。これは他地域と比べ、かなり特徴的といえる。

銘文の形式は基本的に右から「年／梵字 法名／月日」だが、一部「法名／梵字／年月日」、「梵字 法名／干支月日」、「年／梵字 法名」という形式のものがあった。また、年の下ではなく月日の上に干支を持つものが2基あった。

「梵字 法名／干支月日」、「年／梵字 法名」を「年／梵字 法名 月日」の派生形、もしくは一部が摩耗して欠けたと考えると、銘文の形式は大きく2つの形式に分けられる。一つは右から「法名／梵字／年月日」と記すもの。もう一つは「年／梵字 法名／月日」を記すものである。この銘文の変遷に関しては、根来寺の一石五輪塔に対する北野隆亮氏の指摘がある⁵⁾。阿弥陀寺の場合、北野氏の指摘通り、前者から後者へと変遷している。また、前者は1537年を境に現れなくなることから、このころに前者から後者へ移行したと考えられる。ただし、阿弥陀寺では前者の形式を持つ一石五輪塔は1基しか見つかっておらず、このころ普遍的に前者の形式を持つ一石五輪塔がつけられていたのか、いつどの段階で後者へ移行していったのかは、はっきりとはわからない。

法名には、一般の法名として信士、信女、大姉、禅門、禅定門、禅尼が、僧侶の法名として法師、尼、禅師がある。加えて、特に徳を積んだ女性に与えられる「屋」の文字を法名の一部に持つものが2基あった。

また、同寺の過去帳と照合させた結果、5件過去帳と銘文の人物名が一致する例が見つかった。同寺住職によると、どれも田屋の中でも特に古い家であり、寺の過去帳は一部欠けているが、各家に残っている過去

帳をみればさらに一致する人物が見つかる可能性がある。

その他特徴的なものとして、「元亀二／梵字 法名／二月廿六日」と、全く同じ年月日の銘文を持つものが3基見つかった（資料2-18, 21, 50）。この3基は形態もほぼ同一で非常に興味深い事例であるが、なぜこのような一石五輪塔が作られることになったのかは明らかではなく、今後の研究課題である。

終、終わりに

一通り調査の成果と分析をまとめてみた。しかし十分な分析・他地域との比較検討もできておらず、今後の課題ばかりが残ってしまった。

今回の調査では、たとえば不自然な3度の空白期や同一年月日の銘文を持つ3基の一石五輪塔、過去帳との一致など、田屋及びその周辺地域の歴史を考察する際に格好の材料となるような成果があった。

今後はさらに分析や比較検討を行うとともに、田屋地域に残る石造物の調査を行い、この地域における石造物の性格を把握し、紀ノ川流域の石造物における位置づけをはかることが必要だろう。また、文献や考古学の成果もふまえ、田屋地域及びその周辺の地域史を明らかにしていきたい。

本調査参加者一覧

05年度

海津一郎、野田阿紀子、梅田志保、守田めぐみ、岩本茉莉、太田翔一郎

06年度

海津一郎、野田阿紀子、梅田志保、岩本茉莉、太田翔一郎、福田純也、松尾奈美、中本真瑛、湯峯愛

脚注

- 1) なお、詳しい調査方法については、和歌山大学・中世荘園調査会「梓田荘故地の石造物調査・覚書一萩原共同墓地（大福寺）調査報告」（『学芸』45、和歌山大学教育学部、1999）を参照されたい。
- 2) 北野隆亮「和歌山市田屋・阿弥陀寺の凝灰岩製宝塔」（『日引』第8号、2006）
- 3) 『紀伊続風土記』卷之九、直川荘田屋村
- 4) 坂本亮太「石造物からみる中世相賀荘地域」（水稻文化研究所・紀ノ川流域研究会『アジア地域文化エンハンシング研究センター研究成果報告書 紀伊国相賀荘地域総合調査』2005）に紀ノ川筋の石造物調査の包括的な検討がある。
- 5) 北野隆亮「根来寺における中世後期の石造物」（『摂河泉文化資料』第42・43号、摂河泉文庫、1993）

◆資料1

無銘一石五輪塔計測値

番号	全高	空	風	火	水	地	幅	厚さ	地輪の高さ/幅	完・欠・破
11	26.8			6.8	9.6	10.4	12.9	11.1	0.8	欠・破
1	35.3			10.5	10.8	14.0	15.7	15.5	0.9	欠・破
30	31.0			8.0	9.5	13.5	14.5	14.5	0.9	欠・破
57	32.5			7.9	9.6	13.0	13.9	13.4	0.9	欠・破
31	33.8			8.2	10.4	15.2	16.0	15.8	1.0	欠・破
64	33.6			9.3	10.3	14.0	14.2	14.1	1.0	欠
15	15.2					15.2	15.2	15.2	1.0	欠
13	16.5				1.3	15.2	15.0	14.9	1.0	欠・破
17	26.3			6.5	6.3	13.5	12.1	10.9	1.1	欠・破
3	35.5	4.0		7.5	9.0	15.0	13.0	12.0	1.2	欠・破
25	31.0			6.5	9.0	15.5	13.0	12.5	1.2	欠・破
29	29.8			6.1	7.8	15.9	12.6	12.3	1.3	欠・破
68	45.9	7.6	3.4	7.4	8.9	18.6	12.6	12.6	1.5	破
40	21.3					21.3	14.0	14.0	1.5	欠・破
39	39.0				10.0	29.0	12.5	11.0	2.3	欠・破
2	29.5	5.4	6.1	9.4	8.6		15.9	15.7		欠・破
4	13.8	7.4	6.4				10.9	10.5		欠
6	15.5			7.5	8.0		12.0	12.0		欠・破
12	10.0	10.0					13.4	13.8		欠
14	17.5	8.5	6.0	3.0			11.5	10.8		欠・破
22	37.0	8.3	7.3	10.6	10.8		17.3	16.8		欠・破
24	32.3	8.5	6.5	8.3	9.0		14.2	13.0		欠・破
26	18.4	11.6	6.8				14.2	12.5		欠
28	26.7	7.8	4.8	6.3	7.8		13.9	13.0		欠・破
34	29.3	7.3	4.4	8.6	9.0		12.5	11.4		欠
35	12.4			6.0	6.4		10.8	10.4		欠・破
36	20.0			8.0	12.0		16.6	16.3		欠・破
38	13.3	7.8	5.5				9.0	8.4		欠
41	7.6			7.6			11.8	11.9		欠・破
54	27.1	7.1	4.3	7.1	8.6		13.5	12.7		欠
58	13.3	7.1	5.4	0.8			13.3	11.9		欠・破
62	21.5			10.7	10.8		16.0	16.0		欠・破
69	21.3	6.4	4.2	5.9	4.8		10.3	8.4		欠・破

有銘一石五輪塔計測値

番号	年代	全高	空	風	火	水	地	幅	厚さ	地輪の高さ/幅	銘文(●は梵字(種子)の略)	完・欠・破
9	1537/11/21	40.2			10.2	12.2	17.8	16.4	16.5	1.1	川柳上坐公智● 藏禪師/天文六年丁酉十一月廿一日	欠
23	1561?	30.3			6.8	8.5	15.0	13.1	13.0	1.1	永祿四(?)年● 道信禪門/六月六日	欠・破
45	1567	14.5					14.5	12.7	13.2	1.1	永祿十年● 道尋禪門/十月六日	欠
18	1571/2/26	28.0			8.0	7.0	13.0	13.0	12.0	1.0	元龜二● 妙道/二月廿六日	欠・破
21	1571/2/26	27.8			7.1	7.0	13.7	13.0	12.4	1.1	元龜二● 道秀/二月廿六日	欠・破
50	1571/2/26	28.2			7.0	8.1	13.1	12.3	12.0	1.1	元龜二● 見正大師/二月廿六日	欠・破
5	1585/6/18	27.2			6.0	6.6	14.6	12.1	11.5	1.2	天正十三年● 妙善禪尼/六月十八日	欠・破
53	1617/4/21	21.2				0.9	20.3	15.1	15.3	1.3	元和三年● 良泉法師/四月廿一日	欠
52	1630/6/6	45.1			9.1	9.3	26.7	17.1	14.8	1.6	寛永七年● 口(尚?)禪定門	欠・破
42	1634/11/8	22.0					22.0	13.5	13.5	1.6	寛永十一年● 妙正禪定/十一月八日	欠・破
20	1635/12/-	70.0	11.0	14.5	10.0	10.5	24.0	14.9	15.6	1.6	寛永十二年● /十二月日	
56	1635/□/13	30.0				9.3	20.7	14.8	15.2	1.4	寛永十二年● 妙君禪定門/□月十三日	欠・破
61	1638/7/13	24.9				0.7	24.2	14.0	13.1	1.7	寛永十五年● 妙金禪定尼/七月十三日	欠・破
51	1645/10/13	24.3					24.3	17.7	17.5	1.4	天保二年/妙山信女/十月十三日	欠・破
70	1651/2/10	31.1				0.4	30.7	15.0	13.1	2.0	慶安四年● 要屋妙覧信女/二月十日	欠・破
7	1651/10/27	29.5				1.5	28.0	13.9	14.0	2.0	慶安四年● 淨圓信士/十月廿七日	欠・破
48	1652/7/11	20.1					20.1	12.6	13.2	1.6	承応元年● 妙祐/七月十一日	欠・破
33	1655/6/25	28.1				7.1	21.0	12.0	11.5	1.8	承応四年● 妙圓/六月廿六日	欠・破
55	1656/9/19	25.7					25.7	12.6	11.5	2.0	明暦二年● 正永禪定門/四月十九日	欠
47	1655-1658	19.9					19.9	12.7	12.6	1.6	明暦□□● 善壽□□/四月□□	欠・破
8	1659/10/28	40.9			7.5	7.6	25.8	13.2	12.0	2.0	万治二年● 常心信士/十月廿八日	欠・破
65	1659/6/12	31.3					31.3	17.1	16.4	1.8	万治二年● 道祐禪定門/六月十二日	欠・破
63	1667/7/29	21.7					21.7	13.7	12.5	1.6	寛文七年● 道秋禪定門/未七月廿九日	欠・破
32	1672	44.0				11.0	33.0	16.0	16.0	2.1	寛文十二年● 仁日宗吹信士/	欠・破
19	1676/7/15	45.1	5.5	4.3	6.7	6.8	21.8	12.6	12.6	1.7	延宝四丙辰● □西宗可信士/七月十五日	完
10	1682/10/10	52.5	2.5	4.0	8.0	8.0	26.0	12.5	11.5	2.1	天和二年● 聖山榮壽信女/十月十日	完・破
59	1683/12/23	28.4				2.0	26.4	11.2	11.6	2.4	天和三年● 妙順信女/十二月廿三日	欠・破
60	1717/6/26	48.0			7.4	8.8	31.8	15.6	16.0	2.0	享保二年/地● 梅屋妙見信尼/六月廿六日	欠・破
49	□/7/10	41.2			7.2	8.2	25.8	14.7	12.8	1.8	□□三年● □空妙□□/七月十日	欠・破
16	□/8/□	23.8					23.8	10.3	10.1	2.3	● 妙永定尼/子八月□□□□	欠・破
37	□/8/□	16.9					16.9	13.6	13.5	1.2	十六年/信士/日	欠・破

◆資料2 おもな一石五輪塔の拓本



9 1537(天文6)年

川柳上坐公智
天文六年丁酉十一月廿一日
天文六年丁酉十一月廿一日



23 1591(永禄四)年

引道永禄四年
六月六日
引道信禅門



45 1567(永禄10)年

引道永禄十年
十月六日
引道尋禅門



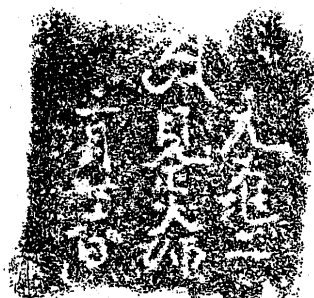
18 1572(元龜2)年

引道元龜二年
二月廿六日
引道妙通



21 1572(元龜2)年

引道元龜二年
二月廿六日
引道志



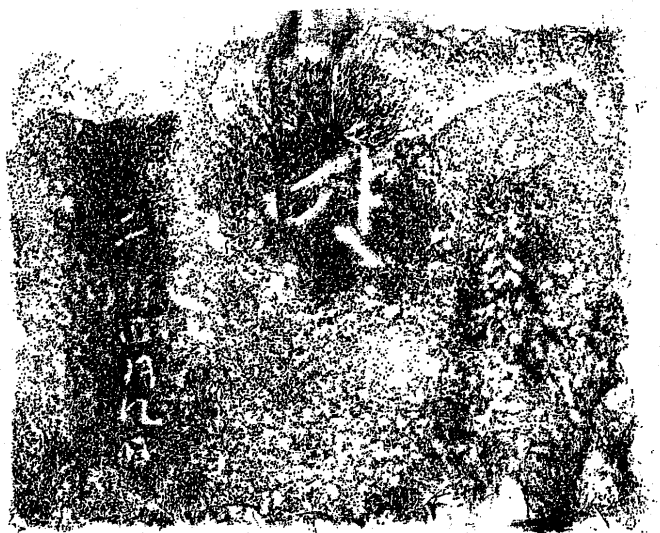
50 1572(元龜2)年

引道元龜二年
二月廿六日
引道正大師



5 1585(天正13)年

天正十三年
六月十八日
善禪尼



45

公証禪門
永二年四月九日
(天正)

◆資料3 一石五輪塔の形態

9 1537(天文6)年	23 1561(永祿4)年	18 1571(元禄2)年	21 1571(元禄2)年	50 1571(元禄2)年	5 1585(天正13)年
20 1635(寛利2)年	8 1659(万治2)年	19 1676(延宝4)年	10 1682(天和2)年	()年	()年

◆資料4 阿弥陀寺内墓地石塔配置図

